

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

当会ゼミは来年1月も休講します

10月初めからコロナ感染が落ち着いていましたが、11月末になって、南アフリカ由来のオミクロン株が世界的に流行となり、先行きの状況が不安定となったので、来年1月も休講とします。

2020年～2021年の歴史トピックス

—齊藤 潔会員記—

この2年間に発掘・解説された歴史的遺産を月刊『文化財発掘出土情報』から取り上げてみました。

＜長野県佐久市の香坂山遺跡・後期旧石器の3点セット出土(36800年前)＞

- 1、日本列島の旧石器時代の存在は、1946年に相澤忠洋が、群馬県の岩宿遺跡の発見で証明されている。しかし、前期・中期の旧石器時代が存在したか否かは、20年前に発覚した発掘捏造事件も絡んで議論が分かれている。日本列島で発見されている最古の人骨は約3万2000年前の沖縄県那覇市山下町洞人である。時代区分では、後期旧石器時代にあたる。
- 2、香坂山遺跡は浅間山の東南約15キロ、八風山山麓南側の標高1080メートルの地点に位置する。群馬県境に近い。1997年に長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われ、その時後期旧石器時代を特徴づける石器製作技術である「石刃」技法(石器になる原石を他の石等で叩いて割り、ナイフの様な鋭い刃をもつ縦長の素材を効率よく獲得する技術)で作った石器等が見つかった。年代は、同時に出土した炭化物のC14測定によって、36千年～35千年前で、石刃出土遺跡としては国内最古だった。
- 3、今回は、奈良文化財研究所の国武貞克氏が短冊形の大型石刃(10cm)、カミノリのような小石刃(3～4cm)、三角形の尖頭器の3点を揃って発掘した。これは初めての発見だった。この3点セットは、ユーラシア

大陸で発見される初期現生人類の持つ石器の組み合わせと共通で、年代は36800年前である。



- 4、現生人類が6万年前にアフリカを出て、ユーラシア大陸を西から東へ移動し、3点セットは、中東(レバント=48年前)、中央アジア(47千年前)、中国北部(44千年前)、朝鮮(42千年前)で、同様の石器群が発見されている。共通点は、遺跡が標高1000m程度に位置して、石器の材料(安山岩・黒曜石)の産地であり、気候・環境も似ている。タジキスタンのフッジ遺跡(47千年前)の石器群とはそっくりである。

＜インドネシアの洞窟でイノシシの壁画:世界最古の動物壁画・豪州のグリフィス大チーム＞

- 1、この壁画はスラウェシ島(セレベス島・面積180千km²)のリアン・テドング洞窟で同チームが2017年に発見し、年代を45500年前(年代測定は壁画全面に付着していた物質をウラン系列法)と分析した。イボイノシシの実物大の絵が、黄土色の絵の具で描かれていた。近くには人の手のような絵も見つかった。



- 2、洞窟壁画はスペインの約6万5千年前のもの

が知られているが、同チームは「動物を描いた絵としては、知られる限り最古だ」としている。

- 3、同島のレアン・ブルシポン4と呼ばれる洞窟にも、岩絵(4万4000年前)が描かれていたことが明らかになっている(豪グリフィス大学の考古学チーム)。全長5メートルにわたり、アノアと呼ばれるこの島固有の水牛やイノシシの一種が描かれている。その横には小さな人間のような姿だが、尾があり、ブタの鼻のような動物の特徴も備えている。又、アノアが槍を持った複数の人物に囲まれた狩猟と思われる描写もあった。
- 4、スラウェシ島には、少なくとも242点の洞窟壁画や岩絵が確認されている、西のカリマンタン島(ボルネオ島・面積743千km²)では少なくとも4万年前に描かれたとみられる動物の絵が発見されている。
- 5、人類最古の絵画は、南アフリカで出土した岩に描かれた73千年前の岩絵である。

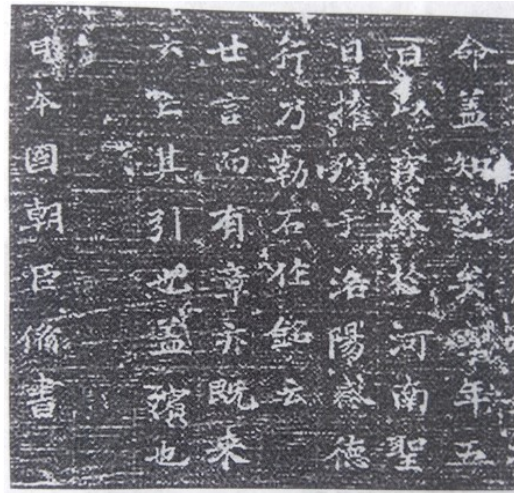
<文武天皇陵>

- 1、飛鳥の中尾山古墳(8C初)が、樞原考研や明日香村教育委員会によって文武天皇陵(宮内庁は明治期に指定された栗原塚穴古墳)として確実視された。文武天皇(683~707年)は天武・持統両天皇の孫で、祖母の持統上皇の後見で、697年に即位した。父の草壁皇子(662~689年)と同様に、20代で死去した。

文武は『続日本紀』筆頭記述の天皇で、主な事績は大寶律令制定と遣唐使栗田真人の派遣である。真人は帰国時(704年)に白村江戦時(663年)で捕虜となった兵士を連れ帰った。又、この時期の世相は全国に飢饉と疫病が流行し藤原京にも及んだ。

- 2、同古墳は竜山石(高砂市)を使用した3段築成(1,2段は石積で3段目は盛土)の八角墳である。使用石は560トンで、高松塚の4倍である。対辺長19.5m、高さ4m以上。外周石敷の対辺長は約32.5メートル。火葬墓で90m四方の石槨内面に水銀朱が全面塗布されていた。
- 3、宮内庁の指定と歴史学会の主張が異なる天皇陵は、齊明天皇陵(宮内庁は高取町の車木ケンノウ古墳)⇒飛鳥の牽牛子ケンゴシ塚古墳(三段築成の八角墳・対辺長22m・使用石550トン以上・明日香村教育委員会が発掘)と継体天皇陵(宮内庁は茨木市の太田茶臼山古墳)⇒高槻市の今城塚古墳である。
- 4、八角墳は天皇陵で、舒明陵の段ノ塚古墳、天智陵の御廟野古墳、合葬墓で天武・持統陵の野口王墓古墳がある。

<吉備真備の筆跡とされる碑文発見>



吉備真備(695~775年)の筆跡とされる碑文を刻んだ唐代の墓誌(深圳望野博物館蔵)は、734年6月に洛陽で死去した鴻臚寺(外国使節接待所)の役人「李訓」のものである。墓誌は石版で縦35cm×横36cmの表面に328文字が楷書で彫られている。碑文の文末に「日本国朝臣備書」と署名がある。備は真備にあたり真備の筆跡だと深圳望野博物館が発表した。これを受けて、東京で翌月(2020年1月)に専門家の研究会で討議した。明大東アジア石刻文物研究所の気賀沢保規所長は、墓誌の形状、字体、文体、歴史事実を踏まえ、「唐代の作品で矛盾はない」と判断。学芸大の橋本栄一准教授は、唐の書の大家褚遂良を学んだ形跡が色濃く、書体も南北朝時代のものを織り交ぜて「技法を示しつつ統一感がある」と書の水準の高さに言及。関東学院大の河内春人准教授は、「朝臣」の表記は「真備と同期の阿倍仲麻呂やそれ以前の栗田真人等、8世紀前半の遣唐使は姓を朝臣とした例が多い」と説明。但し、真備を「備」の1文字にした理由は研究課題となった。

- 1、深圳望野博物館の閻焯館長が、民間コレクターが所蔵していた李訓墓誌を知ったのは2013年。中国では真備は阿倍仲麻呂と共に必ず登場する。「日本国朝臣備書」の「備」は真備を示すと連想した。館長は、李訓と文案を考えた国家図書館の役人褚思光は同年代で親交があった。李の死後、李の家族か褚思光が真備に書を依頼したのではないかと推測した。
- 2、更に館長は、真備は在唐17年間の滞在費の工面も、書の腕前で説明可能だと話す。「書家は墓誌だけでなく、筆写等で重宝されており、書の仕事で十分な謝礼が受け取れたはず」と話す。真備は遣唐使の中で最多の書物を日本へ持ち帰っている。皇帝が留学生に書物を与える事はなく、書物の購入許可の権限

は鴻臚寺にあった。館長は「真備は李訓の死の4か月後に帰国の途についた。墓誌への感謝の気持ちもあって購入が認められた可能性がある」と語った。

3、遣唐使自身の墓誌では、李訓と同年の正月に長安で死んだ「井真成」の中国人筆のものが2004年に発見されている。以上。

和泉式部の愛の遍歴

清野敬三会員記

◇貴船神社の歌碑◇

数年前、当講座世話人会の有志で、京都の貴船から鞍馬を経て大原の里へ山歩きた時のこと、貴船神社で和泉式部の歌碑に出会った。式部が「男に忘れて…」貴船神社に参拝した時に詠んだ歌が刻まれていた。

「もの思へば沢の蛸もわが身より あくがれ出づる魂かとぞみる」(恋しさに悩んでいたら、沢に飛ぶ蛸もわたしの体から抜け出した魂ではないかと見える)

『後拾遺和歌集』にも載っている有名な歌である。貴船神社は水の神であるが、縁結びの神でもある。『沙石集』には、この時の参拝の様子が書かれている。式部は夫藤原保昌の愛を取り戻すため、巫女に「敬愛の祭り」をさせた。巫女は、着物の「マエヲカキアゲテ、タタキテ三度メグリテ、コノ体ニセサセ給へ」と前を露出し、式部に同じことをするよう要求した。式部は「面ウチアカメテ返事モセズ」にいと、巫女は折角思い立ったのに何をぐずぐずしているのかと怒った。そこで式部が詠んだ歌が「ちはやぶる神のみる目もはづかしや 身を思ふとて身をやつすべき」(神様の前で、そんなみつもいないことができるものですか)

夫の保昌は、これを木陰から見ており、式部の様子に感じ入り、一緒に連れ帰り大切にしたと云う。

◇生い立ちと橘道貞との結婚◇

式部の生年は未詳だが、天元元年(978)頃と推定されている。父は越前守大江雅致で、母は越中守平保衡の娘で、ともに受領クラスの中流層である。父雅致は、冷泉帝皇后昌子内親王の太皇太后時代にその大進(上位の判官)に任じられており、母も昌子内親王家の女房で、式部は母に従って内親王家で育成している。

式部も、御許丸という童名で少女時代から昌子内親王に宮仕えしたとみられ、その頃から歌才を認められている。式部の代表作の一つ、「暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月」はその頃の作とされるが、随分と老成した歌である。

式部は18、9歳の頃、橘道貞と結婚した。道貞は、式部

の父雅致の部下であり和泉守であった。なお、和泉式部の名前は、父が前式部丞で夫が和泉守であることから、両者の官職名に由来する。

夫道貞は橘諸兄の後裔にあたるが、この頃は受領階級になっていた。大変な能吏で、生真面目な性格であった。一方、式部は昌子内親王家で華やかな生活を経験しており、既に歌人としてもかなり有名になっていた。交際も派手で「かたらふ人おほかり(多くの男と情を交わした)」と云われ、まもなく二人の間に小式部内侍が生まれると「たれがおや(父親はさて誰か)」などと世間から噂されるほどであった(『和泉式部集』)。

◇離婚・勘当—そして為尊親王へ◇

このような状態から道貞との仲は冷却していった。その時に式部の前に現れたのが美貌と好色で評判の為尊親王で、その情愛の中に溺れ込んだ。式部は、一方では夫道貞にも未練を感じており夫への愛を詠った歌を残しているが、道貞としては許せなかった。式部は夫から関係を断られた上、父雅致もその不貞事件にひどく憤慨し、父からも勘当される憂き目となった。

為尊親王は冷泉帝の第三皇子であり、兄二人は花山帝・三条帝として皇位に就いている。従って為尊親王も皇位に近い立場にある。父冷泉帝は狂疾の気味があり、親王も『栄花物語』によれば、疫病の流行期にも拘わらず夜夜中歩き回ることが多いなど、かなり軽薄で奔放な性格だったようである。親王は式部に対し積極的であったが、式部にも貴顕に対する強い憧れがあり二人の関係は深まり、周囲から指弾されるまでになった。そうした中、親王は夜歩きのせい病が重くなり、長保4年(1002)急逝する。親王の北の方は、式部との不貞を悩み嘆き、親王の死を契機に出家してしまう。式部は、いまだ道貞の所へ帰ることもできず、孤立無援の状態に追いやられた。

◇敦道親王との恋と『和泉式部日記』◇

為尊親王が亡くなり侘びしく暮らす中、故親王の実弟敦道親王との交際が始まる。たちまち親王に夢中になり、式部にとってはこの時期が生涯のうちで最も感慨深く、幸せの時であったと云えよう。その情愛の深化する十か月余りを、日記の形式を借り贈答歌を中心に物語風に描いたのが『和泉式部日記』である。

長保5年(1003)、式部が故為尊親王を偲び「夢よりもはかなき世の中を嘆き侘びつつ」暮らしているところへ、敦道親王の使いの童が橘の花の枝を届けるところから交際は始まった。親王は漢詩文好きで芸術的感性に優れているとの定評があり、二人の贈答歌の応酬から関係が深まる。

式部の親友赤染衛門が、親王と一介の受領の娘という身分の違いを指摘し忠告の歌を贈っても、とても聞き入れるどころではなかった。初めは忍ぶ恋であったが、やがて式部は親王の邸に入ることになった。召人(宮仕え)の形であるが事実上の妻である。親王の北の方は、いたたまれず里へ帰ってしまった。

親王邸での二人の生活は派手であった。賀茂の祭りでは、車に二人が同乗し、御簾を上げて衣などを外まで長くたらし、これ見よがしに見物に出かけた様子が『栄花物語』や『大鏡』に描かれている。二人の間には、永覚という子供も生まれた。しかし、この幸せの期間は長くは続かなかった。出会いから4年後、寛弘4年(1007)親王は27歳の若さで不帰の人となった。式部の嘆きは大きく、親王への哀悼の情を詠じた大量の挽歌が『和泉式部集』に収められている。

◇中宮彰子に出仕◇

式部は敦道親王の死後、虚脱状態に陥り一時尼になろうかとも考えた。しかし道長から声がかかり、一条帝中宮彰子に宮仕えすることになった。そこは紫式部・赤染衛門・伊勢大輔をはじめ多くの女流歌人たちが集まっている一大文化サロンであった。

この時、式部の娘小式部内侍も彰子のサロンに入ったらしい。小式部も少女の頃から和歌に秀いで、母が代作したのではとの疑いをかけられるほどであった。式部が夫と丹後国に赴任して不在の時に、都で歌合せがあった。中納言定頼が、母君の代作の便りはまだですかと、小式部をからかった。そこで小式部が即座に応じたのが「大江山いくの道の遠ければ まだふみもみず天橋立」である。「踏みもみず」と「文も見ず」、「生野」と「行くの」の掛詞など技巧を凝らした歌に、定頼は返歌もせずに逃げ出したという話もある(『十訓抄』)。

◇藤原保昌との再婚と晩年◇

式部は彰子のサロンで和歌をつくり、平穏な生活を楽しむ余裕が出てきた。そうした中、道長の家司藤原保昌と再婚する。保昌は、道長の忠実な家司であり、その信望も厚く肥後守・大和守・丹後守・摂津守を歴任している。武人としても世評が高く、勇壮な人であったらしい。伝説上の大盗賊袴垂が、保昌を襲おうと跡をつけたが果たせず、家に招かれて衣を与えられた話が『今昔物語』にある。なお、盗賊袴垂保輔の説話は、のちに保昌の弟保輔と混同されて創られたものらしい。しかし式部はこの結婚にはさしたる感動はなかったとみられる。夫と一緒に丹後の国へ赴任する時も、都にいる別の「ある人」に心を惹かれる歌を詠ん

だりにしている。

式部の晩年のくわしい様子や死亡年は不明である。保昌は長元9年(1036)に没しており、その死を悼む歌がないことからそれ以前に亡くなったと考えられる。

「あらざらむこの世のほかの思ひ出に いまひとたびの逢ふこともがな」(私はもう長いことはなさそうです。あの世への思い出に、もう一度だけあなたにお逢いしたい)

百人一首に収められたこの著名な歌は、詞書によると式部が重病に臥した時の作である。「逢ふ」とは単に会うだけでなく「夜を共にしたい」と云う意で、正直且つ直截的な表現である。相手は誰だろうか。敦道親王でないとすると道貞への未練か、熱愛した僧の道命か、候補者が多すぎる。

◇式部への評価◇

式部は多くの男性と浮名を流した好色の女性とされている。同時代の道長からは「浮かれ女」と云われ、紫式部からも「和泉はけしからぬかたこそあれ」と異性関係で感心できないと批判されている。

式部を取り巻く男性は上記の道貞・為尊・敦道・保昌の4人だけではない。歌集や世評にあるだけでも、源雅通・源頼信・藤原道綱・藤原隆家・源俊賢・藤原兼房・道命阿闍梨など大勢の名前が挙がっている。よく云えば、それだけ男性を魅惑する情熱的な女性であったと云えよう。

しかし、歌人の歴史的評価という点では、遺された歌からこそ評価されるべきであろう。紫式部は、和泉式部について「歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ。」として、歌は大変興味深いとその力量を認めているが、一方、歌の道理からみると本当の歌詠みとは云えないと手厳しい(『紫式部日記』)。

これは、以前当講座でも講演をお願いした歌人馬場あき子氏がその著『和泉式部』で述べているが、和泉式部は本質的な詩人で、口にそのまま出てくる言葉が歌になってしまうが、紫式部は歌とは古歌の知識などを基礎に推敲し添削し工夫して練り上げるべきものとしている。つまり、歌への基本的な考え方の違いと云えよう。奔放な和泉式部と堅実な紫式部の姿勢の対比が面白い。

情熱的な歌人である与謝野晶子は、和泉式部を高く評価しており、それが現在では定着しているようである。式部の作品は、ただ情熱だけを詠うのではなく、多情だけでなく純情、愛欲と共に哀愁、奔放でいながら寂寥というように相反した感情が織り込まれているとしている。ただ僕のような朴念仁には、憧れはあるが手に余る世界である。了